



第4章 『浪江のこころ通信』 が果たしてきた役割
（町民・取材者座談会）

これまで『浪江のこころ通信』に関わってきた取材者や町民の方、行政の担当者、プロジェクトリーダーが集まり、平成26年1月13日午後、福島市内にて座談会を開催しました。『浪江のこころ通信』のこれまでの歩みと、被災後3年が経過して見えてきた課題や今後のあり方について話し合いました。

とき 平成26年1月13日（月・祝）

ところ ホテル福島グリーンパレス
桂の間

参加者

金澤 崇さん

浪江町請戸地区出身。東京都内にて避難生活を送る。避難先の自治体で臨時職員として勤務している。

富川 牧江さん

浪江町川添地区出身。京都府内にて避難生活を送る。平成25年から町の復興支援員として関西地方を中心に交流会の開催や町民の個別訪問などを行っている。

玉川 啓さん

福島県職員。震災発生時は浪江町役場に出向しており、平成25年3月まで町の復興推進課主幹として復旧・復興に従事した。

古山 郁さん

特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ代表理事。これまでに28件の取材活動を行っている。

齋藤 和人さん

特定非営利活動法人山形の公益活動を応援する会・アミル代表理事。『浪江のこころ通信』第一号から山形県内に避難している町民への取材に携わる。

櫻井 常矢（コーディネーター）

高崎経済大学教授。町の復興アドバイザーで、浪江のこころプロジェクトの発案者・プロジェクトリーダーでもある。



座談会の様子

『浪江のこころ通信』のはじまり

櫻井 『浪江のこころ通信』は、震災直後の平成23年4月に、私が町役場に企画提案したところから始まりました。

玉川 正直なところ、最初に櫻井先生が役場に行かれた時期は、申し訳なかったのですが、『浪江のこころ通信』の発行を考えるところではない状況でした。当時はまだ多くの町民の所在がつかめず、避難している方も体育館で寝起きしている状態で、宿泊施設等に二次避難の手配を必死でしていた時期でもありました。目の前の仕事に追われる役場では出来ない、県外に散り散



齋藤 和人さん

りになった町民の取材をしていただけたということでありがたいという気持ちがあった反面、それに応えられないもどかしさもありました。

ただ、そのような状況ではありましたが、町民同士お互いにどこにいるかがわからず、消息に関する情報は必要な時期であり、その重要性はわかっていました。そのため、二度目に櫻井先生にお会いして以降は、広報誌の担当職員の努力もあり、『浪江のこころ通信』と、もともと発行していた町の広報誌をセットにして7月1日から再開する決断をすることができました。

櫻井 二度目の時は仕事を終えた夜の時間に福島駅の中で打ち合わせした記憶があります。会合を重ねる中で、心ある職員の方たちの強い想いを感じることで、浪江町の皆さんとなら頑張っていけるという決断ができました。互いに役割を果たすことができたからこそ、ここまで継続できたのだと思います。

『浪江のこころ通信』は、全国各地の取材協力者の方々に町民の皆さんの取材をしていただく仕組みにしています。当時、どのような気持ちで取材に取り組んでいたのかをお聞かせいただけないでしょうか。

齋藤 山形県は震災の直接の被害は比較的少ない地域でしたが、震災直後は太平洋側の交通障害の問題から支援物資が山形経由で運ばれたり、原発事故による自主避難の方がたくさん山形県内にいらつしたり、といったことで震災の当事者としての意識も強くありました。

こちらは避難された皆さんを受け入れる立場です。『浪江のこころ通信』の取材を始めるときに、その想いを共有できるかどうか、どういった切り口でお話を伺っていったらよいかといった悩みがありました。実際お話を伺ってみると、つらい経験のお話や衝撃的な内容もあり、取材を躊躇してしまうことも正直言っていましたね。

ただ、その後、取材の回数を重ねる中で、町民の皆さんのお話の中に共通するお店や地区の話が多く出てくるようになり、そういった中から私たちも徐々に元の町の様子を共有できるようになってきたような気がしています。

櫻井 私も町の復興計画に関わるにあたって、取材を通して町民の皆さんの生の声・ふるさとへ



古山 郁さん

の想いを聞かせていただけたことが大きく、助けていただいたという気持ちがありました。

古山 私の住む福島市周辺では、震災から2ヵ月後の平成23年5月、伊達郡桑折町に浪江町の方が280世帯近く入る仮設住宅ができました。その仮設住宅への支援を始める時期に取材のお話をいただいたので、比較的スムーズに入ることができたと思っています。最初はただただ町民の皆さんのお話を聞いて言葉を引き出すというスタンスで取材していました。原稿はお話いただいたことを丁寧に整理し、取材者としての想いはリード文と写真キャプションに込めさせていただきます。

櫻井 取材している中で大切にしていることは、どのようなことがあるでしょうか。

齋藤 取材した内容をそのまま掲載することは大切になっています。取材する中で、前向きな生活の様子などがあれば、よくお話を伺うようにしています。ただ、個人的な内容・想いが強く出るお話の時は、どのようにまとめたらよいか悩むこともありますね。

古山 最近では1取材1ページで1,000字程度にまとめることが多くなっています。この1,000字というのは、長いようで短い原稿量なんです。ですから、たくさんお話いただいた中身をどう絞っていくかとても悩みます。取材の方法としては、役場が町民の方に許諾を取った上で連絡をいただき、その上で取材者がアポを取って取材に伺うという流れなので、

非常にスムーズで助かっています。実際取材先でお会いすると、たいていの方が穏やかに対応していただけます。本当はもっといろんな想いをお話したいとか伝えたいということもあるのではないかと想像するのですが、それをどこまで伝えきれているかという気持ちは正直なところあります。

■町民の皆さんにとっての『浪江のこころ通信』

櫻井 震災からそろそろ3年になりますが、最近、避難されている町民の皆さんに変化を感じることはありますか。またその中で、『浪江のこころ通信』はどのような役割を果たしていると思われませんか。

金澤 最近、福島県内と県外避難者の間でも、温度差が出てきているような気がします。避難先に腰を落ち着けることを決めた方もいれば、まだ暮らしの方向性を決められない人もいます。東京に避難していると、どうせなら東京オリピックまでここにしようか、などと思ったりすることもあります。一方で県内に残っている仲間からは、まだ被災地の復興工事も済んでいないのに、何で大規模な公共工事を東京で始めるのか、と言われたことがありました。自分の想いを伝えると、相手の想いとすれ違うことがどうしても増えてきていますね。



櫻井 常矢プロジェクトリーダー

戻る・戻らないということに加え、被災直後に比べても、みんなの思うベクトルの方向がバラバラになってきているように感じます。それを1つにまとめていくのが難しくなっているのではないかと思います。

富川 県内に残っている親戚や友人と話をしていると、県外に避難している私たちとずいぶん状況に差が出てきていると感じます。阪神・淡路大震災の体験を聞くと、3年目くらいから引きこもりなど様々な問題が出てきたとのことですが、ちょうど今がその時期になっていると思います。

櫻井 古山さんは主に県内の取材をされていますが、そのような違いは感じますか。

古山 県内を取材して感じることは、最初の1年



金澤 崇さん

は、帰町への想いや避難した仲間を気遣う話が
多く聞かれました。ところが2年目位から、先
の见えない焦りや怒り、あきらめともとれるよ
うなお話が増えてきたように思います。取材を
お断りされるケースも出てきています。物を言
わない、あるいは言えない人が増えていくこと
についての危機感は強く感じています。

金澤 取材を一旦承諾したのに、その後よく考え
てから取材を断るという気持ちは個人的にはよ
くわかります。町の広報誌に掲載される前提で
話すことを意識すると、帰らないということ
口に出してもよいのかどうか、記事を読んだ友
人に何か言われるのではないか、ということ
を考えてしまうのではないのでしょうか。そうす
ると、話ができなくなってしまう。

齋藤 昨年夏くらいから、町民の皆さんそれぞれ
の考えが多様になっていてることを感じます。前
向きに人生設計を考え始めてすでに県外に生活
拠点を置いた方もいれば、他の町民の方との接
点も少なく悩みを深めている方もいます。それ
に伴って、自分の想いを『浪江のこころ通信』
に出してしまつてよいのかどうか悩んでいるケ
ースも増えていると感じます。自分の話したこと
が掲載されたときに、自分と違う選択をした知
人が何を思うかということを考えてしまう、と
いうことだと思っています。

ただ、どこで生活するにしても、自分が生ま
れ育つたのは浪江であるというのは共通のこと
なので、『浪江のこころ通信』には、そうした
根つこの部分をつないでいく役割はあると思
います。

富川 震災直後であれば、自分の被災の体験など
を話す機会として重要であり、話もしやすかつ
たと思います。私も、『浪江のこころ通信』の取
材を受けたことがあります。その時は、震災
前に担当していた公民館の高齢者教室の受講者
の皆さんに自分が元気であることを知らせたい
という気持ちが強くありました。掲載された
後、連絡をくださった方もいたりして、とても
うれしかったことが思い出されます。ただ、3
年近く経過すると、町民としては、話しづら
いことが増えてくるのではないのでしょうか。先
日、あるご夫婦を取材させていただく機会があ
りましたが、ご主人のお話、奥様のお話それぞ

れをどうまとめ表現するかということが、と
ても難しいことだと感じました。

櫻井 確かに、震災直後は取材を受けたことで、
自分の消息を知らせることができてよかったと
いう声が多くありました。他方で最近では、取材
が成立する件数が少なくなつてきているのも事
実です。家族の中で、取材を受けるかどうかで
意見が分かれてしまうケースもあります。逆に
第三者が取材に入ることを通じて、初めてご夫
婦の間で将来のことを話すことができたとい
う方もいらっしゃいました。

一方で、前向きな話しか掲載されていないの
ではないかという批判の声も届いています。読
者の立場としてどのように感じていらっしゃるか
お聞かせください。



玉川 啓さん

金澤 『浪江のこころ通信』があることによって、全国の仲間が各地でがんばっているということがわかります。そうしたつながりを感じることもできるのは、『浪江のこころ通信』しかないので、大変だと思いますがぜひ継続して欲しいと思っています。

個人的には、他の方のお話されている内容を、自分が今後どのように生活していけばいいのか、生きていくべきなのかを判断する時の参考にさせていただいています。各家庭それぞれの状況の中で、個々にどのような将来への想いをお持ちであるかを読ませていただいて、それを私の道しるべにしています。

富川 当初、関西に避難した際に『浪江のこころ通信』を読んで、多様な家族のあり方・形が、自分の家族について考えるときの参考になりました。

今でも広報誌が来ると、『浪江のこころ通信』を最初に見ます。今のように長い文章ではなく、短い近況と写真が載っているだけでも、見る人にとっても嬉しい情報かもしれません。

櫻井 町民の皆さんが互いの置かれた状況や想い、悩み、悲しみを直接会って話すことができ、ない環境をなんとか改善したいということが『浪江のこころ通信』をつくる時にありました。今のお話だと、その点についてはお手伝いできているのかなと感じます。

玉川 『浪江のこころ通信』は行政と町民をつなぐ役割に加え、町民と町民、町民とふるさと浪江



富川 牧江さん

をつなぐ役割が重要なのだと思います。通り一遍の行政情報ではそのような役割を果たすことはできないし、将来に向けて悩みを抱えている方にとっては後者の役割が重要なのだと思っています。

「これからの『浪江のこころ通信』に期待すること

櫻井 『浪江のこころ通信』の目的の1つとして、町民の皆さんの「想いの記録」ということがあります。『浪江のこころ通信』が始まった平成23年7月から今日までの経過の全体像を見る視点が大事だと思いますね。そういった継続性を保

ちながらも、今後の『浪江のこころ通信』のあり方については工夫が必要ではないかとも思っています。

玉川 局面が変わっていく中で、その先を読んで手を打っていく重要性を改めて意識させられました。『浪江のこころ通信』の当初の目的としては、被災の共通の悩みを共有するということがありました。しかし「避難」から「暮らし」の局面に入っていくと、それぞれの町民が個々に重ねてきた経験から選択肢が多様になっていくのは自然な流れです。時間がたつにつれ、徐々に個々の判断が伴う話をしないといけなくなり、行政の発行物としては、難しくなっているのだと思います。

『浪江のこころ通信』の今後については2つの方向性があるのではないのでしょうか。1つは、富川さんがおっしゃったように、近況を簡単に伝える内容にする方向というのがありましたね。ただ、それだと金澤さんのおっしゃったような個々の将来への想いや判断の理由といったところまでは聞き出せなくなるので、そこはもう1つの方向性ということがあるのだと思います。できればその2つの内容を一緒にやっていければいいと思います。

3年が経ち、自治体職員の立場から最近の記事を読んでいると、他の事業でも住民に働きかけたり問いかけたりする際の切り口といったことも見えてくるような気がします。行政としてはそういった活かし方もあると思います。

金澤 『浪江のこころ通信』は、取材を受けた方の想いを引き出す役割もあると感じました。周りに想いを話し伝える相手がいらないような場合に、特に大切な存在ではないかと思えます。結果的に掲載にならなくても、取材という関わりが大切になることもあるのではないのでしょうか。浪江の復興計画や『浪江のこころ通信』のやり方なども、3年を機会に、町民の意見を入れながら見直ししていくことも必要だと感じています。

富川 『想いの記録』という意味で、『浪江のこころ通信』はこれからも続けていくことが重要だと思います。被災後3年というのは、町民の心があるんな意味で変化していく時期であり、大変だと思えますが、ぜひ協力していきたいと思っています。

櫻井 町民に最初に問い合わせが行くのが役場からなので、固く構えてしまう方もいらっしゃるようです。とはいえ、民間からでは個人情報の問題もあつて難しいところだと思います。

古山 役場からアプローチがあった上での訪問なので、非常にスムーズに日程調整ができます。ところで以前、借上住宅の自治会長さんを取材した際に、住民が支援慣れしてしまって自立できなくなってしまうという言葉を聞きました。支援組織としてどきっとさせられる言葉でした。私たち中間支援の役割は変化を見つめながら支援ニーズを読み、つなげていくことかと思っています。私どもの団体では、県北地域の

避難者を対象とした「おたがいさま新聞」という通信を発行しています。一方的な支援活動ではなく、避難者も支援団体も一緒に取り組む活動を紹介するようにしています。

『浪江のこころ通信』については3年経つても、まだやりつくしていないのではないかと思います。気持ちが強くなります。取材を断つた方の想いを伝える機会は本当はないのかと思つたりします。昨年くらいから再取材シリーズが始まり、アーカイブとしての意義も大きいと思えます。紹介は短くてもよいので、件数を重ねられればいいのではないかと思います。

齋藤 『浪江のこころ通信』が果たしている役割は大きいですね。『想いの記録』だったり、互いの近況を知ることができる、あるいは町民が自分の想いを整理する機会になる等、様々な機能があるだろうと思われれます。今後は、自分にとつてのふるさとの位置づけを確認していく機会にもなり、成長していく子どもたちが自分たちのふるさとをどうとらえていくか、といった継続的な記録も必要になってくるのではないのでしょうか。復興計画に対しても、会議という固い場だけではなく、『浪江のこころ通信』を通してより気軽に、ふるさとへの想いを伝えていくことができると思います。

櫻井 『ふるさととのつながり』というキーワードが見えてきました。全国で交流会を開くと、町の行事（十日市）や日常の買い物先（サンプラザ）といったように、町民の共通の話題があり

盛り上がっていきます。こうしたつながりは、どの町にもあるわけではないので、ぜひとも大切にしていきたいと思っています。

玉川 行政から見ると、アンケートや説明会などで声の大きい方、考えの強い方の想いは受け止めることはできます。一方で、町民の大多数を占める、声の小さい方や声をあげない方、迷い続けている方の声をくみ取ることは難しい。そ



ういった声なき声を拾っていく上では、取材という活動はとても大切です。そういった声をまぢづくりの動きにつなげていくためにも、参画の方法の1つとして重要になっていくだろうと思います。

また、町民と役場をつなぐという意味からは、役場各課の職員に取材をして、それぞれの取り組みを発信していくというのによいのではないのでしょうか。

金澤 町民座談会のような形式もよいのではありませんか。同じ地域に避難した町民が集まって、話し合いながら記事にしていけることも、また違う話が聞けると思います。年代別にやると、また異なる話も聞けるのではないかと思います。

櫻井 皆さんにお話しいただいた内容から、今後、『浪江のこころ通信』を続けていく上でのポイントを整理してみたいと思います。

まず、一点目として、町民の皆さんそれぞれの考えや生き方の多様性を伝え続けていくという意味から、『浪江のこころ通信』は引き続き取り組む必要があると感じました。ただ、この多様性に応えるということは行政だけの取り組みではできないことです。行政と民間の協働事業であるからこそ実現できる役割が今後必要ですし、今回のように町民の方にも入っていただき方向性を話し合う機会を持ちながら継続していく必要があるだろうと思います。

二つ目としては、言葉の大切さを感じまし

た。アンケートをとって数字として把握するのはなく、一人ひとりの町民の皆さんの思いや生き方を言葉として記録していく重要性が高まってきています。そのような状況の中で、『浪江のこころ通信』という手段・方法を復興の過程で引き続き活かしていきたいと感じました。

三つ目は、町民の皆さんの声として、声の大きい方だけではなく、声を出せない方の小さな声を町の復興につなげていく際の役割も『浪江のこころ通信』には求められていくと思います。

本日の座談会は、震災後3年間の取り組みを振り返るよい機会になったと思います。いただいたご意見を踏まえながら、今後も『浪江のこころ通信』を続けていきたいと思えます。そのあり方については、いろいろなご意見を取り入れて進めていきたいと思えますので、今後ともよろしく願います。本日はありがとうございます。

